

イザヤ書40章「慰めよ、慰めよ、わたしの民を」

1A 償われる咎 1-11

1B 叫ぶ者の声 1-8

2B 良い知らせ 9-11

2A 力ある神の到来 12-26

1B 創造の知恵 12-20

2B 人の営みを無にされる方 21-26

3A 疲れない方 27-31

本文

イザヤ 40 章を学びます。この章から、預言の内容が大きく変わります。その主題が、40 章 1 節のことば、「慰めよ、慰めよ、わたしの民を。」というものです。神に選ばれた民は、自分たちの罪のためバビロンに捕え移されました。しかし主は、あわれみ深いお方で、彼らの罪を赦し、約束の地に帰らせてくださいます。紀元前 539 年のことです。このことをもって、主は、イスラエルの救い、また異邦人の救いを語られます。

イザヤ書の学びの冒頭で、この預言が、小さな聖書とも呼ばれているという事を話しました。聖書全体に貫かれている神の救いのご計画が啓示されています。前半が 39 章分、後半が 27 章分あるとお伝えしました。たまたまですが、旧約聖書が 39 巻あり、新約聖書が 27 巻あります。内容も、旧約と新約に沿っています。前半においては、主がイスラエルを試されるが、彼らがへりくだる中で救ってくださるという内容でした。後半においては、彼らがすでに裁かれたけれども、その中で慰めと癒し、贖いを語られます。新約聖書は、まさにそのメッセージを語っています。すでに、律法によって裁かれ、懲らしめを受けているイスラエルの民に、慰めのことばをもつてメシアによる贖いを宣言しています。主イエスが言われました、「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。(ヨハネ 3:17)」すでに罪の中において、そのさばきを身に沁みて知っている人々に、御子は、罪の赦しの慰めをくださる方です。

これまで、メシアについての預言が前半部分に、数多くありました。主が、処女からお生まれになること、ガリラヤで宣教を始められることなどがありました。これから 40 章には、さらに細かいところで、福音書でイザヤが預言したメシアの姿が数多く出てきます。メシアが、主のしもべとして、神にへりくだって仕え、民の罪の身代わりにまでなられるという、まさに福音書の話が出てきます。というか、イザヤによって神のくださった、メシアによる贖いが、福音書によって確かに実現したことを教えているのです。

後半は、主に三つの部分に分かれます。それぞれの終わりが、「悪しき者には平安がない。」という言葉で終わっています。初めは、40章から48章です。ここには、神の主権によって、キュロス王を用いて、ユダヤ人を解放して、エルサレムに帰還させる、神の計画について話しています。次は、49章から57章です。ここでは、今、話しました、主のしもべと呼ばれる、メシアの姿が出てきます。イスラエルと一つになってしもべの姿と取ります。そして、イスラエルの受けた傷、罪のために身代わりに死なれるという預言までがあります。そして、最後の部分が58章から66章です。主がすべてを贖われ、万物をも贖われ、救いを完成されることを預言しています。新しい天と新しい地の預言もここにありま。

この大まかな流れを見ると、父なる神が救いをご計画する姿を40章から48章で見ます。それをキリストが実行に移される姿を、49章から57章までに見ます。そして、その救いをキリストの再臨によって完成するという流れを、最後、58章から66章までに見ます。

1A 力ある神の到来 40

1B 償われる咎 1-11

1C 叫ぶ者の声 1-8

1¹「慰めよ、慰めよ、わたしの民を。—あなたがたの神は仰せられる—²エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その苦役は終わり、その咎は償われている、と。そのすべての罪に代えて、二倍のものを主の手から受けている、と。」

慰めよ、慰めよ、と一度ならず、二度声をかけておられます。そして「優しく」語りかけよ、とありますが、これは「心に」と訳すこともできる言葉です。頭ごなしではなく、私たちの心に沁み込んでいくようにして優しく、主が語りかけてくださいます。どのようにして慰められるのか？「苦役が終わる」とありますが、「戦いが終わる」と訳しても良い言葉です。バビロンの中に生きている、その圧迫の中にある戦いが終わるということです。その捕囚は、彼らが主に逆らっていたから、主がそのなるように仕向けたものでした。しかし今、主がその罪を豊かに赦してください。

それで、「二倍のもの」という言葉でその豊かさを表現しています。この二倍というのは、モーセの律法から来ています。「出 22:7 人が金銭あるいは物品を隣人に預けて保管してもらい、それがその人の家から盗まれた場合、もしその盗人が見つかったなら、盗人はそれを二倍にして償わなければならない。」物を誰かが盗んだということは、それを盗んだ物だけを盗んだのではありません。その人に神がその物を所有させた、尊厳と権利を奪ったのです。ですから、その人は精神的、また霊的な傷を受けています。ですから、同等のものを返済するだけでは償いになりません。さらに、付け足して二倍にすることによって、ようやく償いができます。

主は、そういった意味を含む「二倍」という言葉を使っておられます。つまり、自分の罪によって

失ったものを埋めるだけではないのです。罪をただ赦すというだけではないのです。それに加えて、主は祝福する恵みを下さるのです。多くの人は、憐れみは求めますが、恵みを受けるのをためらいます。自分自身は、神の裁きから免れたいと願って、憐れみは求めます。けれども、それ以上を求めるのは、虫が良すぎると感じるのです。しかし、主は気前の良い方なのです。主は、あの放蕩息子を赦し、受け入れた父親のように、もっともっと祝福したいと願っておられます。

ところで、イザヤはここで、バビロン捕囚七十年後の帰還のことを踏まえながら、イスラエルの救い主、キリストが来られることも預言していました。イエス様がお生まれになって、宮に幼子を捧げるためにヨセフとマリヤはエルサレムに来ましたが、「ルカ 2:25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルが慰められるのを待ち望んでいた。また、聖霊が彼の上におられた。」とあります。そして、「私の目があなたの御救いを見たからです。(30 節)」と言っています。敬虔なユダヤ人シメオンは、当然のことながら、イスラエルをイエスの御名にあつて、私たちが悩み苦しんでいた、心で戦っていた罪の縄目から、その罪の豊かな赦しによって解放されるのです。

³ 荒野で叫ぶ者の声がする。「主の道を用意せよ。荒れ地で私たちの神のために、大路をまっすぐにせよ。⁴ すべての谷は引き上げられ、すべての山や丘は低くなる。曲がったところはまっすぐになり、険しい地は平らになる。⁵ このようにして主の栄光が現されると、すべての肉なる者がともにこれを見る。まことに主の御口が語られる。」

その慰めを主が来られる前に、その備えをしなればいけないという呼びかけの声があります。それは「荒れ地」から来ます。それは、神なしで生きていた、命のない人間の世界を象徴しています。しかし、大路をまっすぐにせよ、という声をかけます。イザヤが預言で語っていた大路は、散らされていたイスラエルの民がエルサレムに帰還するための大路として何度となく出てきました。主の贖いのための大路です。

ところで、昔の大路は、凸凹になっている道を凹んでいる部分は埋めて、盛り上がっているところは平らにして、何とか通れるように整えていました。特に、王が通る時は前もって、「王の道を整えなさい」と前もって呼びかける者がいます。これが霊的にもそうなのだ、ということを教えています。王なる神の栄光が現れるために、谷は埋められ、山は低くされなければいけません。そうでなければ、その栄光を見えなくさせてしまいます。人間は、ある者は高くなり、またある者は低くされています。しかし、主の前ではすべての人が同じところに立ちます。全ての人が罪を犯し、全ての人が神の前に有罪であり、しかし全ての人が、罪の供え物となってくださったキリストを信じる信仰によって救われることができます。

そこで、新約聖書の福音書では、この荒れ地の声がバプテスマのヨハネの声であったことを確

認しているのです。彼は、ユダの荒野で、悔い改めのバプテスマを説きました。「マタ 3:1-3 そのころバプテスマのヨハネが現れ、ユダヤの荒野で教えを宣べ伝えて、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と言った。この人は、預言者イザヤによって「荒野で叫ぶ者の声がする。『主の道を用意せよ。主の通られる道をまっすぐにせよ』』」と言われた人である。」私たちは、自分が主を受け入れるのを妨げていた、その高ぶりを悔い改めて、主によって取り除いていただき、へりくだってこの方の前に出ていきます。

⁶「叫べ」と言う者の声がする。「何と叫びましょうか」と人は言う。「人はみな草のよう。その栄えはみな野の花のようだ。⁷ 主の息吹がその上に吹くと、草はしおれ、花は散る。まことに民は草だ。⁸ 草はしおれ、花は散る。しかし、私たちの神のことは永遠に立つ。」

何を叫んだのか？それは、神のことは永遠に立つ、ということです。どんなに人が栄えてようが、それは花のようにはかなく、散り、ただ神のことは永遠に立つということです。バビロンがどんなに華やかでも、散ってしまいます。しかし、主のことは、バビロンの破壊などについてのことは、永遠に立つのです。

このみことを、ペテロは、福音のことはとして第一ペテロ 1 章で引用しています。「1:23-25 あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る、神のことはによるのです。「人はみな草のよう。その栄えはみな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことは永遠に立つ」とあるからです。これが、あなたがたに福音として宣べ伝えられたことはです。」私たちが、この世にある栄えを見る時に、どうしてもうらやましく思ってしまう。けれども、私たちが聞き、受け入れている神のことはこそが、永遠に立つのです。

2C 良い知らせ 9-11

⁹ シオンに良い知らせを伝える者よ、高い山に登れ。エルサレムに良い知らせを伝える者よ、力の限り声をあげよ。声をあげよ。恐れるな。ユダの町々に言え。「見よ、あなたがたの神を。」

これは、主なる神がシオン、エルサレムに戻って来られる時、それを迎える人々の声です。具体的には女性たちが上げている声であります。かつてダビデが戦いから戻ってきて、サウル王も戻ってきた時に、タンバリンを持って、「サウルは千を討ち、ダビデは万を討った。(1サムエル 18:7)」と言いましたが、そのような情景です。

¹⁰ 見よ。神である主は力をもって来られ、その御腕で統べ治める。見よ。その報いは主とともにあり、その報酬は主の御前にある。¹¹ 主は羊飼いのように、その群れを飼い、御腕に子羊を引き寄せ、懐に抱き、乳を飲ませる羊を優しく導く。

バビロンに捕え移された者たちにエルサレムに帰還する報いを主なる神は与えてくださいます。周りの国々から圧迫されている彼らですが、力強い腕で治めてくださり、しかし彼ら自身は羊に對するように優しく導いてくださいます。

9 節から 11 節のこの言葉は、キリストにあっても実現します。主が甦られ、天に昇られ、聖霊が臨まれました。そしてエルサレムから、良き知らせ、罪の縄目からあなたがたを解放するのだというイエス・キリストの福音が宣べ伝えられたのです。信仰を持たないユダヤ人の間で弟子たちは恐れていましたが、「恐れるな」と主は励まされます。そして、「見よ。あなたがたの神を。」と呼びかけています。福音は、イエスこそが王また神であることを伝え、この方の支配に入る喜びです。

そして 10 節にある主の力ある到来は、イエス・キリストの再臨において完成されます。報いを持ってくると書かれていますが、黙示録 22 章、主の再臨について語っているところでイエスご自身が引用しておられるのです。「黙 22:12 見よ、わたしはすぐに来る。それぞれの行いに応じて報いるために、わたしは報いを携えて来る。」そして主は、神の国において、ご自分の民に対して羊飼いのように優しく養ってくださいます。まことの羊飼いであり、良い羊飼いです。

2B 圧倒的に優れた方 12-26

イザヤは、このようにして、神が王として力を持ってこられるという、良い知らせを伝えていきます。「見よ、あなたがたの神を。」と 9 節で叫んでいます。その神がどのような方か、いかに偉大で、知恵に満ちているかをこれから語ります。

1C 創造の知恵 12-20

¹² だれが手のひらで水を量り、手の幅で天を測り、地のちりを升に盛り、山々を天秤で量ったのか。もろもろの丘を秤で。¹³ だれが主の霊を推し量り、主の助言者として主に教えたのか。¹⁴ 主はだれと相談して悟りを得られたのか。だれが公正の道筋を主に教えて、知識を授け、英知の道を知らせたのか。

この地球にある水、そして地の塵はどれほどのものでしょうか？そして天はどれほど大きいものでしょうか？全く想像できない、膨大なものです。しかし、神にとっては、手のひらで水を図れます。手の幅で、天を測っておられます。山々も天秤で量るほど、小さいものです。あのヒマラヤ山脈の偉大さを私たちは写真や映像で見ますが、主にとっては天秤に測れるほどです。

そして、これらの被造物を見て、すべて主がお造りになられたことを知れば、どれほど知恵があるかが分かります。その知恵の富は計り知れず、また主のご計画は思いをはるかに超えていることがわかります。ところが、人間は、滑稽なことをしてしまうのです。それは、主なる神に対して助言をすることです。「主よ、このようにしたら、もっとうまくいくと思います。」と、あたかも自分のほう

が主よりも賢いかのようにふるまいます。「なぜ、神はこんなことを許すのか？」と非難する人は、言い換えると、「私は神よりもっと賢い」ということなのです。

神がイスラエルを選ばれた時の、圧倒的な主権と知恵についてパウロがロマ 11 章で述べました。初めに、神がイスラエルを選ばれたのは、異邦人が神に対して不従順なことを示すためでした。そして福音が来て、ユダヤ人が拒み、異邦人が受け入れたのは、ユダヤ人も不従順であることを示すためでした。そして最後にユダヤ人に憐れみを示して、救われます。これはもともと、すべての人が不従順で、すべての人が神の憐れみによって救われることを教えるためだったのです。それでパウロは神の知恵に圧倒するのです。「ロマ 11:33-36 ああ、神の知恵と知識の富は、なんと深いことでしょう。神のさばきはなんと知り尽くしがたく、神の道はなんと極めがたいことでしょう。「だれが主の心を知っているのですか。だれが主の助言者になったのですか。だれがまず主に与え、主から報いを受けるのですか。」すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るのです。この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」

¹⁵ 見よ。国々は手桶の一しずく、秤の上のごみのように見なされる。見よ。主は島々をちりのように取り上げる。¹⁶ レバノンも、薪にするには足りない。その獣も、全焼のささげ物にするには足りない。¹⁷ すべての国々も主の前では無いに等しく、主には、空しく何も無いものと見なされる。

主がいかに大きい方かを言い表しています。当時のユダヤ人たちは、商売でごまかしていないことを示すために、秤の上のほこりを口の息で吹き飛ばすのだそうです。それで、「秤の上のごみ」と言われています。そして、島々がちりのように取り上げられるのですが、日本列島も、塵のようにみなされているのです！レバノンは、見事な杉で有名です。その森さえも、いえにえのための薪にたりません。

ここで、どんな力強い国であっても、主の前で無いに等しいことが分かります。バビロンという超大国であっても、主にあっては何でも無いのです。

¹⁸ あなたがたは神をだれになぞらえ、神をどんな似姿に似せようとするのか。¹⁹ 鋳物師は鋳像を鋳て造り、金細工人はそれに金をかぶせ、銀の鎖を作る。²⁰ 貧しい者は、奉納物として 朽ちない木を選び、巧みな細工人を探して、動かない彫像を据える。

偶像をつくることについての愚かさを書いています。バビロンの中で生きてきたユダヤ人にとって、このことを思い出すのは、とても必要だったことでしょう。神といえば、人が造ったものであるというのがそこでは当たり前でした。しかし、私たちにはそうではないということです。

偶像について、滑稽なセリフが聖書にあります。ヤコブと妻たちが、ラバンの家を逃げるようにし

て出ていきました。ラバンが追い付きました。彼は、テラフィムが盗まれていました。ラケルがそつと盗んでいたのです。そして、追いついた時に、ラバンはヤコブに言います。「なぜ私の神々を盗んだのか。(創世 31:30)」盗むことの神だったのです。滑稽であります。しかし、私たちが何かを失った時に、まるで人生がすべて終わったかのように嘆くのであれば、まさにそれが自分の神さまになっている、ということです。

2C 人の営みを無にされる方 21-26

²¹ あなたがたは知らないのか。聞いていないのか。初めから、告げられていなかったのか。悟っていなかったのか。地の基のことを。

主は、問いかけておられますが、これは反語的です。つまり、だれも、初めから告げられていないし、悟っていません。地の基のことを知って、聞いている人はいないのです。主は、同じことをヨブに問いかけたことがあります。「38:4-7 わたしが地の基を定めるとき、あなたはどこにいたのか。分かっているなら、告げてみよ。あなたは知っているはずだ。だれがその大きさを定め、だれがその上に測り縄を張ったかを。その台座は何の上にはめ込まれたのか。あるいは、その要の石はだれが据えたのか。明けの星々がともに喜び歌い、神の子たちがみな喜び叫んだときに。」神の御使いたちは、地の基を主が定められた時に、それを見ていたようです。共に喜び歌っています。

²² 主は、地をおおう天蓋の上に住む方。地の住民はバツタのようだ。主は、天を薄絹のように延べ広げ、これを天幕のように張って住まわれる。

地の基だけでなく、天においても主が造り、支配しておられます。圧倒的な広大な空を見る時に、その上に主が住まわれているのですから、地の住民はバツタのように見えるのです。今でこそ、飛行機で雲の上に行くことができます。そこから見える地上は、本当に小さいです。天蓋の上に住まわれる主であれば、なおさらのことです。

カナンの地に偵察にいった12人のうち十人が、約束の地を悪くいふりました。「民数 13:32-33 私たちが行き巡って偵察した地は、そこに住む者を食い尽くす地で、そこで見た民はみな、背の高い者たちだ。私たちは、そこでネフィリムを、ネフィリムの末裔アナク人を見た。私たちの目には自分たちがバツタのように見え、彼らの目にもそう見えただろう。」彼らがいかに間違っていたかは、ネフィリムにとっての我々ばバツタのようだと言ったことです。いいや、ネフィリムは、主の前でバツタのようなのです。ですから、カレブとヨシュアは、衣を裂いて叫んで、「彼らは私たちの餌食となる。」と言いました(14:9)。私たちもバツタのような人々を、いかに主にあつてバツタと思えるか、信仰をしっかりと働かせる必要があります。

²³ 君主たちを無に帰し、地をさばく者たちを空しいものとされる。²⁴ 彼らが植えられ、蒔かれ、いよ

いよ地に根を張ろうとするとき、主はそれに風を吹きつけ、彼らは枯れる。暴風がそれを藁のように散らす。

バビロンにまだいる彼らにとって、君主は神のように強い存在です。けれども、君主や地をさばく者たちが何をしようとしても、主のみこころによって、いかようにでもなるのだということです。ここで暴風は、暑くて非常に乾燥した風です。ですから、それが作物に当たるものなら、一気に枯らしてしまいます。彼らの悪だくみも、一気に無にされるのです。

²⁵「それなのに、あなたがたは、わたしをだれになぞらえ、だれと比べようとするのか」と聖なる方は言われる。

多くの人の問題は、これほどに偉大で、思いをはるかに超えた方なのに、私たちの知っているものになぞらえて、比較しようとしていることです。自分の理解に合わせて、神のなされていることを測ります。神を信じているとされる者たちの中でも、その過ちを犯してしまうことが多いですね。

²⁶ あなたがたは目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方はその万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって呼ばれる。この方は精力に満ち、その力は強い。一つも漏れるものはない。

天地創造の記述には、主が光を造られた時に、昼と名づけておられます。そして、大空を造られた時に、天と名づけ、地の乾いたところを地とし、水の集まったところを海と名づけられました。星々については、記述はありませんが、詩篇 147 篇に書いてあります。「147:4 主は星の数を数えそのすべてに名をつけられる。」名をつけるのは、創造的な働きであり、その名づけた人の支配に入る意味合いがあります。

その一つ一つの万象がいかに力強いものであるかは、国々を支配する天使たちが、星々と呼ばれることからわかります。そこで主は、ご自身が精力に満ち、その力が近いと言われるのです。そして大事なものは、その力から漏れるものはないと言われます。

3B 疲れない方 27-31

そこで主は、ご自身のことばを、ご自身の民、イスラエルに向けられるのです。

²⁷ ヤコブよ、なぜ言うのか。イスラエルよ、なぜ言い張るのか。「私の道は主に隠れ、私の訴えは私の神に見過ごされている」と。

バビロンの地にいるイスラエルの民が、自分たちの訴えが誰にも届けられていない、主なる神

も聞いてくださらない、とつぶやいて、その疲れを感じていることに対する、神の慰めの言葉でした。バビロンに捕え移されてから外国に住むという屈辱を受けている彼らが、呻いて、叫んでいるけれども、まるで天井に向かって祈っているような気分になっていました。

私たちが、彼らと同じように、疲れを覚えてつぶやいてしまうことがありますね。私たちが信仰生活に疲れを覚えるのは、まさにここでつぶやいている内容があるからです。主が自分の今、通っているところを見ておられない、と感じる時です。そして訴えていることが、見過ごされていると感じる時です。私たちは自分の道を一度、点検するとよいと思います。疲れを覚えていたら、必ずどこかで、自分だけにその思いを閉じ込めて、主は見ておられない、見過ごしておられると思い込んでいるところから、始まっています。

²⁸ あなたは知らないのか。聞いたことがないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造した方。疲れることなく、弱ることなく、その英知は測り知れない。

主は、これまでご自身に語られたことを、ご自分の民に呼び起こしておられます。まず、主は永遠の神です。私たちは、「神はあの時まで私に心を留めてくださっていたが、あの時から私のことを忘れてしまった。」ということできません。永遠の神ですから、どんな時にも神はいてくださいます。自分が独りだと思っていた時にも、主はしっかりとおられたのです。そして、「地の果てまで創造した方」です。主が、あの人には届いて、働いておられるが、私のこの道までには届いていないだろうと思込むのです。いやいや、地の果てまで創造された方は、自分にも届いておられます。

²⁹ 疲れた者には力を与え、精力のない者には勢いを与えられる。

主は、これほどまで力強い方ですから、疲れ知らずです。イエス様が、ベテスダの池にいた足なえの男を立てましたが、安息日でした。それを咎めたユダヤ人指導者らに対して、こう答えられました。「ヨハ 5:17 わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです。」主は天地創造の時から、一度も休まれたことがありません。天地創造の次、七日目は休まれたとありますが、だからといって、活動をやめていたわけではありません。やめていたら、天の万象は、またたく間に崩れていたことでしょう。創造はしていませんが、創造したものを保っておられたのです。それで次に、ご自身のこの力と勢力を、信仰をもって受け取る道を教えられます。

³⁰ 若者も疲れて力尽き、若い男たちも、つまずき倒れる。³¹ しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように、翼を広げて上ることができる。走っても力衰えず、歩いても疲れぬ。

疲れ知らずと言えば、若者の特権ですね。けれども、その若者でさえ疲れます。自分は精力があるので万能感が出て来てしまいましたが、いやいや、限界があるのだよと教えているのが 30 節

です。私たちは、疲れない秘訣は自分の肉の力にはないことを覚えるべきです。

そうではなく、「主を待ち望む」ことです。これは、英語には出てこない、すばらしい訳を日本語聖書はしています。ただ待つだけではなく、望みながら待つことです。英語はただ、wait としか書いていません。

私たちの弱さは、待てないことです。何かをしなければいけないと思い、その必要に応えるべく動いていくことです。何かをしていないと気が済まないのです。このような動きをしていると、自分では一生懸命やっているつもりなのに、間違っただけに進んでしまっているのです。頑張れば頑張るほど、悪い結果をもたらします。私たちは、主を待ち望む必要があります。群衆がイエス様に、「私たちは、神のわざを行なうために、何をすべきでしょうか。」と尋ねました。イエス様は、「神が遣わした者をあなたがたが信じること、それが神のわざです。(ヨハネ 6:29)」と言われました。何か行動に移すのではなく、イエス様が何を行っておられるか観察することです。自分で早まって、これが神のわざだと決めつけるのではなく、イエス様に、「私はここにいます。あなたが命じることを行ないます。」と言って、御前に静まるのです。そうすれば、イエスが命じてくださいます。そして、私たちはその命令に応答します。

そうすると、「新しく力を得、鷺のように、翼を広げて上ることができる」と言っています。小鳥ではなく、鷺であることに注目してください。私は、イスラエル旅行で、ガリラヤ湖畔にあるガムラと呼ばれる遺跡に行ったことがあります。そこで、鷺が空中に止まっている姿を見ました。ガリラヤ湖からの風が強いので、ただその風に乗っかっているだけで、翼を動かしていないのです。雀のような小鳥はどうでしょうか？小鳥は自分の羽根を激しく、急いで動かすことで飛んでいます。鷺は、動かしません。風に乗る方法を知っているのです。

これが、主を待ち望む者の姿です。御霊の風に乗って動くのです。すでに御霊の流れ、御霊の風はあるのです。いや、流れていなければその流れを見つけるまで待っているのです。そうすれば、自分が走っていても力衰えることはありません。主の力があるからです。そして、流れがないかな？と思う時は待っていますが、疲れることはありません。待っている時の力をくださいます。だから、歩いていても疲れないのです。このようにして、霊的に疲れることから私たちは守られるのです。